
R e m e m b r a n c e

幸谷遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rememberance

【著者名】

幸谷遙

N4888A

【あらすじ】

主人公が旅をしているという話です。初めてなので目を通してください。ただけたら光栄です。

もはや私は異国を持つていなかつた。彼の地を踏むことを私が夢見ることは失われていた。それの喪失が私にもたらしたのは実であり虚であるようなのだ。私は新たになり、旅立たねばならなかつた。ただちに荷物を纏め、恋人のもとへ挨拶に行こうとしたが顔を思い出すことが出来なかつた。女もまた見失つた異国の住人であるらしかつた。そして私の名を呼んでくれる人々も一人としていなくなつていて。私は堪えられないほど辛くなつて涙した。思わず指にすくつた涙は味がなかつた。

気持ちが落ち着くと、私は他人同士でひしめく車内にいた。皆、この列車が発つのを待つてゐる。どの顔も誰ともいたくないと言いたげに下を向いている。私は少し気が楽になつた。ここでならどの人間も誰かと一緒にいながら独りきりであることに気付き、また哀しくなればここに来ればよいのだろうと思つた。本当に、家族連れであろうとお互い気まずそうに頭をつき合わせて無口だが、真に居心地が悪いのではないのだ。やがて私は揺られながら眠つてゐた。

目を開けるとまず私の荷物が盗まれてゐることに気付いた。何ていうことだらう。何時の時分であれど、こそ泥は健在なのだ。腹立たしいが致し方あるまい。盜みに走るときの感情は、愛にまつわる人間のそれと同じで人類普遍の欲求であるのだから。装つた乙女で表される地上の愛というものは複雑でありその正体に凡人が触れようとするものではない。ああ何を口走つてゐるのだろう。：それならば天上の愛とは何なのであらうか。

また仕切り直しである。幸い切符と財布は手元にあつたので私は目的地へ辿り着くことが出来た。ここで目的地などと言つても明確な意志が介在してゐるわけでもなく、ああこの辺りではないだろうかと、意味もなく路線を選んだ結果であつた。身軽な身体で無人のプラットフォームに立つと、私は自分が見知らぬ土地に來てゐる実

感を持った。異国とは斯くのよつた思いを引き起こすものではなかつたかと頭をかすめたが、つまらないことだと打ち消した。

降り立つた土地は獸の頭をもつ人間が暮らす土地であつた。ライオンを中心として、猫、犬、鷲、鹿など古今東西の動物達の頭部が見れた。

宿の場所を聞こうと早速一十日鼠の男に尋ねた。

「東の町に孔雀の御宿、西には象の御宿、南町などは水牛どもの宿場がありますし、北には一番安い羊の宿がございます。」

きいきい声に後悔してから私は南の方へ行つた。道々、住人達が私を振り返つていつた。この地に人間の頭部で住み着いた者はいかつたので、私が彼らにとつて異邦人であることは明白だつた。子供などは素直なもので、珍しげにこつそり私の後をついてくる者が数名ばかり。宿まで行けば私と同じ立場の人間もいるだろうと心配されて、なるべく余裕があるように足を運んだ。

水牛の宿場町は大きな川を越えた所にあつた。大きく湾曲した橋を渡ると下方で荷物を運ぶ船がすれ違つていて、船を漕ぐ人間の顔はやはり何かの獸であつて、私はどんどん私の顔がちゃんと人間の顔のままであるか自信がなくなつていた。

手鏡は荷物とともになくしたし、水面は確かめるには遠すぎた。ふらふらして歩が乱れ始めた頃合いに、私は橋を渡り終えていた。道のあちこちに客が溜まつっていた。この土地の人間が多いようだつたが、そうでない人間もいた。一種類の人間の内、私がどちらに属しているかなど些末であるように思えてきた。どちらでもいいのだ。どちらであつても軽蔑されるのだし。

「いらっしゃいませ。お荷物はござりますか。」

水牛の尖つた角が見事だつた。誰彼の区別のつかないとこり、この角に対する思い入れが私に人物を見分けさせた。

「いいえ。来るまでに盗られてしましました。」

「まあそれは災難です。で、如何ほどな部屋になさいましょう。料

金ならこの通り…。」

「ふふつ。財布は無事だったんで中くらいの部屋には泊まれそうだ。」

「まあよつじやります。足りない物、なくされた物を揃えますならば、この裏手に狐の商店街がございますのでどうぞ足を運ばれぐださいまし。」

案内された部屋は三階で人通りに面した窓があった。木枠の窓を開けて、やはり木製の欄干に肘をついた。

仮性の国だった。住民の顔に真実はなかつた。それは陳腐なマスクでしかなかつた。私は虚を失い実に取り憑かれている。

しばらくそのまま行き交う人々を見下ろしていた。いろんな人間がいる。人通りが絶えない。ふと部屋を見返せば猫の頭がふすまを開く。

「御用はございませんでしょうか。」

茶代目当ての小間使いの少女だった。

「うん。煙草を買ってきておくれ。」

銘柄と金を持たせ再び道に目を戻す。少女が走っていくのも見えた。何だか自分が疲れていることに気がいつて目を閉じた。旅に出たことを後悔し始めた。何故逃げるようになつたのだろう。何処がいけなかつたのだろう。過ぎ去つたことを何度も思い直し、ついに女、私の恋人に行き着いた。あの女は一体なんであつたのだろう。女の実在を疑う以前に自分の存在が揺らいでいる今、女の存在を証してることとは私の存在に繋がることだった。

しかし女はここにいない。ここにいないのならほかのところにいるとも断言出来ない愚かな私がいた。誰か私の名前を読んでくれまいが。それだけでいいのであるのに。

気付けば私の手を握る者がいた。左手は依然と私の頭を支えている。右手は誰かの両手に包まれて、その形は私にとつて懐かしいものだつたけれど、目を開くことをためらつた。

「お前かい？」

何とかそれだけをしぼり出す思いで言った。女の少しだけ暖かい

手に、力がこもった。

「お前なら俺の名前を呼んでくれ。不安なんだ。」

女が返事をしないので自分がそのまま寝入ってしまった果ての夢なのかと思った。それでなければ実も知らぬ商売女が押しかけて来たのだ。

「目をお開けください。」

私ははつとした。声は違えようもない愛しい女の声だった。どうしてこの人の存在をうたぐつてしまつたのだろう。透ける頬を持つ美しい女。長い睫毛で瞳が隠れてしまうところが好きだった。

女は私の手を取っている。

「あなた。あなたが私のことを忘れてしまつても、私はあなたとずっとこうして手を繋いでいたいと思いましたのよ。」

肩を震わせ、涙が溜まつている女を抱き寄せた。夢であるはずがなかつた。

「いつかあなたが私を迎えてくださること待っていますわ。必ずそうしてくださいませ。お願いです。」

まあいじらしいことよ。私も必死で約束をした。そして一瞬のまばたきの間に女は姿を消してしまつた。

短い逢瀬の余韻に浸る間もなく猫の少女が頭を覗かせた。駄賃をやると不審そうに私を見た。

「さつきはしませんでしたがどういがします。」

女の残り香だった。少女の言葉が私に更なる確信を持たせた。

私は実を失つて虚に取り憑かれていたのだ。からくりの正体は見えないが、旅の目的は見えた。女と約束したからそうするのだ。そして旅は続いている。

さて、私は気が狂つたのだろうか。自分の中にはそういう思いもある。これはまともな考えではなく、女も異国という憧憬も全て、旅をしていることすら私の妄想なのでは?

私はすぐに答えられる。それで構わないと。気が狂つていようと、いまさら正氣に戻つたところで私は生きられまい。私には誰もいな

いのだ。だから私は女と異国を求め続けよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4888a/>

Remembrance

2010年10月8日14時21分発行